



Title	出生時体重と情緒発達
Author(s)	後藤, ヨシ子
Citation	長崎大学教育学部教育科学研究報告, 22, pp.63-70; 1975
Issue Date	1975-03
URL	http://hdl.handle.net/10069/31471
Right	

This document is downloaded at: 2020-10-31T18:18:52Z

出生時体重と情緒発達

後 藤 ヨ シ 子

(昭和49年10月31日受理)

はじめに

出生時体重の大小という生物学的条件のその後の成育上における問題は、乳児・新生児期の死亡率罹病率をはじめ、身体的知的発達においても低体重児に何程かの劣りが指摘されてきている⁽¹⁾⁽²⁾⁽³⁾。中でも1000g. 台の **very low birth weight** 児の発達上の **handicap** は多く今後の医療的技術・養育に大きな課題をなげかけているといえる。

他方精神的発達における情緒の研究は極めて少なく、今後の研究に俟たれている。

今回は出生時体重の大小による情緒の発達の関与を明確にするため、親の養育態度、保育器期間の長さならびに社会的条件を考慮しながら分析を試みた。

方 法

対象は1968年4月2日～1969年4月1日の出生児中、1973年4月長崎市内幼稚園20校4才児組在園児1334名(表1)。

表1 対象児

	～2500	2501～3700	3701～	計
男	24	592	83	699
女	36	562	37	635
計	60	1154	120	1334

調査内容は田研式親子関係診断テスト⁽⁴⁾、幼児児童性格診断テスト⁽⁵⁾、生育歴の3種類。すべて質問紙法により母親記入。実施期間は1973年6月下旬～7月上旬。

出生時体重区分は低体重児群(WHOの定義により2500g.以下)、成熟児群(2501g.～3700g.)、過重児を含む高体重児群(3701g.以上)に3区分。社会的要因は父親の職業をもとに専門的および管理的職業を上、事務的職業を中、販売的職業・熟練的・半熟練的および非熟練的職業を下とし3群に大別。これら社会的要因による出生時体重3群間には、分布の偏りを認めなかった(表2)。なお分析にあたり、今回は男女児一括して考察した。

表2 社会的要因別の分布 (%)

	上	中	下	計	χ^2 テスト
～2500	5 (8.3)	27 (45.0)	28 (46.7)	60	d f = 4
～3700	71 (6.2)	609 (52.8)	474 (41.0)	1154	$\chi^2 = 1.829$
3701～	6 (5.0)	64 (53.3)	50 (41.7)	120	.7 < p < .8
計	82	700	552	1334	

成 績

(1)出生時体重別親の養育態度及び性格特性

母親の養育態度10項目中不良な態度(40パーセント以下危険地帯)の出現率は、厳格型を除き他の項目にて2500g以下群により多く、3701g以下群により少ない。良好な態度(45パーセント以上普通及び良好)の出現率は、2500g以下群により少なく、3701g以下群により多い。出生時体重3群間における有意な差異は積極的拒否、干渉、盲従の3項目に見い出された。つまり低体重児群の母親は他の2群の母親に比し拒否的、干渉的かつ盲従的態度の傾向がより強い(表3)。

表 3 出生時体重別親の養育態度 (%)

		不 良			計	F テスト		不 良			計	F テスト	
		~	40	45				45	好	~			40
1 積極的 拒否	~2500	45	(75.0)	15	(25.0)	60	6 不安	~2500	28	(46.7)	32	(53.3)	60
	~3700	780	(67.6)	374	(32.4)	1154		~3700	480	(41.6)	674	(58.4)	1154
	3701~	73	(60.8)	47	(39.2)	120		3701~	39	(32.5)	81	(67.5)	120
2 積極的 拒否	~2500	49	(81.7)	11	(18.3)	60	7 溺愛	~2500	24	(40.0)	36	(60.0)	60
	~3700	823	(71.3)	331	(28.7)	1154		~3700	413	(35.8)	741	(64.2)	1154
	3701~	77	(64.2)	43	(35.8)	120		3701~	46	(38.3)	74	(61.7)	120
3 厳格	~2500	18	(30.6)	42	(70.0)	60	8 盲従	~2500	25	(41.7)	35	(58.3)	60
	~3700	404	(35.0)	750	(65.0)	1154		~3700	299	(25.9)	855	(74.1)	1154
	3701~	40	(33.3)	80	(66.7)	120		3701~	28	(23.3)	92	(76.7)	120
4 期待	~2500	12	(20.0)	48	(80.0)	60	9 矛盾	~2500	29	(48.3)	31	(51.7)	60
	~3700	174	(15.1)	980	(84.9)	1154		~3700	529	(45.8)	625	(54.2)	1154
	3701~	15	(12.5)	105	(87.5)	120		3701~	48	(40.0)	72	(60.0)	120
5 干渉	~2500	19	(31.7)	41	(68.3)	60	10 不一致	~2500	26	(43.3)	34	(56.7)	60
	~3700	278	(24.1)	876	(75.9)	1154		~3700	386	(33.4)	768	(66.6)	1154
	3701~	16	(13.3)	104	(86.7)	120		3701~	33	(27.5)	87	(72.5)	120

※……………P < .05 ※※……………P < .01

次に母親からみた子どもの性格特性では、情緒不安定、依存的、社会性なし、自制力の欠如、体質的不安定の5項目にてその出現率は、2500g以下群により多く、3701g以下群により少ない。顕示性、攻撃衝動的の2項目は、逆に2500g以下群により少なく他の2群により多い。他の4項目神経質、退行的、家庭不適応、学校不適応には体重群間に殆んど差異は見られなかった。以上の点から性格特性の総合的項目である個人的不安定、社会的不安定にてその出現率は2500g以下群により多く、他の2群により少ない。しかしながら体重3群間における有意な差異はすべての項目に見ることは出来なかった(表4)。

表 4 出生時体重別性格特性 (%)

		不 良			計	F テスト		不 良			計	F テスト	
		~	30	35				好	~	30			35
1 顕示性	~2500	12	(20.0)	48	(80.0)	60	6 退行	~2500	12	(20.0)	48	(80.0)	60
	~3700	260	(22.5)	894	(77.5)	1154		~3700	236	(20.5)	918	(79.5)	1154
	3701~	32	(26.7)	88	(73.3)	120		3701~	21	(17.5)	99	(82.5)	120
2 神経質	~2500	19	(31.7)	41	(68.3)	60	7 攻撃	~2500	17	(28.3)	43	(71.7)	60
	~3700	315	(27.3)	839	(72.7)	1154		~3700	308	(26.7)	846	(73.3)	1154
	3701~	38	(31.7)	82	(68.3)	120		3701~	39	(32.5)	81	(67.5)	120
3 不安	~2500	15	(25.0)	45	(75.0)	60	8 社会性	~2500	12	(20.0)	48	(80.0)	60
	~3700	215	(18.6)	939	(81.4)	1154		~3700	164	(14.2)	990	(85.8)	1154
	3701~	18	(15.0)	102	(85.0)	120		3701~	15	(12.5)	105	(87.5)	120
4 自制力	~2500	16	(26.7)	44	(73.3)	60	9 家庭適応	~2500	9	(15.0)	51	(85.0)	60
	~3700	195	(16.9)	959	(83.1)	1154		~3700	176	(15.3)	978	(84.7)	1154
	3071~	23	(19.2)	97	(80.8)	120		3701~	19	(15.8)	101	(84.2)	120
5 依存性	~2500	16	(31.7)	44	(68.3)	60	10 学校適応	~2500	6	(10.0)	54	(90.0)	60
	~3700	275	(23.8)	879	(76.2)	1154		~3700	104	(9.0)	1050	(91.0)	1154
	3701~	26	(21.7)	94	(78.3)	120		3701~	12	(10.0)	108	(90.0)	120

出生時体重と情緒発達（後藤）

		不 ～ 良 30	良 35 好 ～	計	χ^2 テスト			不 ～ 良 30	良 35 好 ～	計	χ^2 テスト
A 身体的不安定	～2500	7 (11.7)	53 (88.3)	60	C 社会的羞	～2500	15 (25.0)	45 (75.0)	60		
	～3700	84 (7.3)	1070 (92.7)	1154		～3700	236 (20.5)	918 (79.5)	1154		
	3701～	7 (5.8)	113 (94.2)	120		3701～	25 (20.8)	95 (79.2)	120		
B 個人的羞	～2500	28 (46.7)	32 (53.3)	60							
	～3700	408 (35.4)	746 (64.6)	1154							
	3701～	42 (35.0)	78 (65.0)	120							

(2) 保育器使用期間の長さとの親の教育態度及び性格特性

保育器使用は2500g以下群に圧倒的に多く36.7%3人に1人であり、2501g～3700gに1.4%、3701g以上群には全然見られない。保育器期間の長さでは、成熟児群には10日以内がその87.5%をしめるに対し、2500g以下群では27.2%、1ヶ月以上が31.8%最大は4ヶ月間であった。低体重児群で保育器使用のうち10日以内の比較的未熟度の軽いと思えるもの6名を除き、10日を超えるもの16名と保育器を全く使用していない低体重児38名との比較を行った。

親の養育態度ではすべての項目にて良好な態度は保育器使用群により少なく、未使用群により多い。有意な差異は厳格、矛盾の2項目に見られている（表5）。

表 5 保育器使用有無別（2500g以下群）親の養育態度（%）

		不 ～ 良 40	良 45 好 ～	計	χ^2 テスト			不 ～ 良 40	良 45 好 ～	計	χ^2 テスト
1 優越的罪	使用群	12 (75.0)	4 (25.0)	16		6 不安	使用群	9 (56.3)	7 (43.7)	16	
	未使用群	30 (78.9)	8 (21.1)	38			未使用群	16 (42.1)	22 (57.9)	38	
2 疑念的罪	使用群	14 (87.5)	2 (12.5)	16		7 溺愛	使用群	9 (56.3)	7 (43.7)	16	
	未使用群	29 (76.3)	9 (23.7)	38			未使用群	14 (36.8)	24 (63.2)	38	
3 厳格	使用群	8 (50.0)	8 (50.0)	16	※	8 寛待	使用群	9 (56.3)	7 (43.7)	16	
	未使用群	8 (21.1)	30 (78.9)	38			未使用群	16 (42.1)	22 (57.9)	38	
4 期待	使用群	4 (25.0)	12 (75.0)	16		9 矛盾	未使用群	12 (75.0)	4 (25.0)	16	※
	未使用群	7 (18.4)	31 (81.6)	38			未使用群	16 (42.1)	22 (57.9)	38	
5 干渉	使用群	6 (37.5)	10 (62.5)	16		10 不安	使用群	7 (43.8)	9 (56.2)	16	
	未使用群	10 (26.3)	28 (73.7)	38			未使用群	15 (39.5)	23 (60.5)	38	

※……………P < .05

性格特性では、全項目にて不良な特性の出現率は保育器使用群により多く、未使用群により少ない。有意な差異は自制力の欠如、退行的、攻撃衝動的、家庭不適応、個人的不安定の5項目に見られ、なお情緒不安定、体質的不安定にも有意な傾向が見い出されている。比較的少数例ではあるが保育器使用群の情緒発達には何程かの問題がより多く存在していると言えるかもしれない（表6）。

表 6 保育器使用有無別（2500g以下群）性格特性（%）

		不 ～ 良 30	良 35 好 ～	計	χ^2 テスト			不 ～ 良 30	良 35 好 ～	計	χ^2 テスト
1 顕示性	使用群	3 (18.8)	13 (81.2)	16		4 自制力	使用群	6 (37.5)	10 (62.5)	16	※
	未使用群	7 (18.4)	31 (81.6)	38			未使用群	5 (13.2)	33 (86.8)	38	
2 神経質	使用群	7 (43.8)	9 (56.2)	16		5 依存性	使用群	6 (37.5)	10 (62.5)	16	
	未使用群	10 (26.3)	28 (73.7)	38			未使用群	9 (23.7)	29 (76.3)	38	
3 不安	使用群	7 (43.8)	9 (56.2)	16	#	6 退行	使用群	7 (43.8)	9 (56.2)	16	※
	未使用群	7 (18.4)	31 (81.6)	38			未使用群	4 (10.5)	34 (89.5)	38	

		不良 ~ 30	良好 35 ~	計	χ^2 テスト			不良 ~ 30	良好 35 ~	計	χ^2 テスト
7 攻撃	使用群	8 (50.0)	8 (50.0)	16	※	A 社会的	使用群	4 (25.0)	12 (75.0)	16	#
	未使用群	8 (21.1)	30 (78.9)	38			未使用群	3 (7.9)	35 (92.1)	38	
8 社会的性	使用群	3 (18.8)	13 (81.2)	16		B 個人的	使用群	12 (75.0)	4 (25.0)	16	※
	未使用群	9 (23.7)	29 (76.3)	38			未使用群	14 (36.8)	24 (63.2)	38	
9 家庭	使用群	5 (31.3)	11 (68.7)	16	※	C 社会的	使用群	5 (31.3)	11 (68.7)	16	
	未使用群	3 (7.9)	35 (92.1)	38			未使用群	10 (26.3)	28 (73.7)	38	
10 学校	使用群	3 (18.8)	13 (81.2)	16							
	未使用群	3 (7.9)	35 (92.1)	38							

#.....0.05 < P < .1 ※..... P < .05 ※※..... P < .01

(3)社会的要因別親の養育態度及び性格特性

親の養育態度において、同じ社会的条件内では多くの項目にて出生時体重の大なる群ほど良好な態度の出現率は多く、不良な態度の出現率は低体重児群により多い。同時に同じ体重群内では社会的条件の良好群により良好な態度の出現率は多く、不良な態度の出現率は社会的条件の不良群により多い(表7)。

表 7 社会的要因別親の養育態度 (%)

		~ 2 5 0 0		2 5 0 0 ~ 3 7 0 0		3 7 0 1 ~		
		不 ~ 40	良 好 45 ~	不 ~ 40	良 好 45 ~	不 ~ 40	良 好 45 ~	
1 消極的拒否	上中下	3 (60.0) 21 (77.8) 21 (75.0)	2 (40.0) 6 (22.2) 7 (25.0)	44 (62.0) 410 (67.3) 326 (68.8)	27 (38.0) 199 (32.7) 148 (31.2)	2 (33.3) 40 (62.5) 31 (62.0)	4 (66.7) 24 (37.5) 19 (38.0)	
	χ^2 テスト							
2 積極的拒否	上中下	3 (60.0) 23 (85.2) 23 (82.1)	2 (40.0) 4 (14.8) 5 (17.9)	49 (69.0) 442 (72.6) 332 (70.0)	22 (31.0) 167 (27.4) 142 (30.0)	3 (50.0) 42 (65.6) 32 (64.0)	3 (50.0) 22 (34.4) 18 (36.0)	
	χ^2 テスト							
3 厳格	上中下	2 (40.0) 10 (37.0) 6 (21.4)	3 (60.0) 17 (63.0) 22 (78.6)	34 (47.9) 214 (35.1) 156 (32.9)	37 (52.1) 395 (64.9) 318 (67.1)	0 23 (35.9) 17 (34.0)	6(100.0) 41 (64.1) 33 (66.0)	
	χ^2 テスト			※				
4 期待	上中下	1 (20.0) 4 (14.8) 7 (25.0)	4 (80.0) 23 (85.2) 21 (75.0)	5 (7.0) 73 (12.0) 96 (20.3)	66 (93.0) 536 (88.0) 378 (79.7)	1 (16.7) 7 (10.9) 7 (14.0)	5 (83.3) 57 (89.1) 43 (86.0)	
	χ^2 テスト			※※				
5 干渉	上中下	1 (20.0) 9 (33.3) 9 (32.1)	4 (80.0) 18 (66.7) 19 (67.9)	14 (19.7) 151 (24.8) 113 (23.8)	57 (80.3) 458 (75.2) 361 (76.2)	0 8 (12.5) 8 (16.0)	6(100.0) 56 (87.5) 42 (84.0)	※
	χ^2 テスト							
6 不安	上中下	1 (20.0) 13 (48.1) 14 (50.0)	4 (80.0) 14 (51.9) 14 (50.0)	20 (28.2) 247 (40.6) 213 (44.9)	51 (71.8) 362 (59.4) 261 (55.1)	1 (16.7) 21 (32.8) 17 (34.0)	5 (83.3) 43 (67.2) 33 (66.0)	
	χ^2 テスト			#				

		～ 2 5 0 0		2 5 0 1 ～ 3 7 0 0		3 7 0 1 ～		
		不 ～ 良 40	良 45 好 ～	不 ～ 良 40	良 45 好 ～	不 ～ 良 40	良 45 好 ～	
7 溺受	上 中 下	2 (40.0) 10 (37.0) 12 (42.9)	3 (60.0) 17 (63.0) 16 (57.1)	20 (28.2) 204 (33.5) 189 (39.9)	51 (71.8) 405 (66.5) 285 (60.1)	1 (16.7) 25 (39.1) 20 (40.0)	5 (83.3) 39 (60.9) 30 (60.0)	
	χ ² テスト			※				
8 盲従	上 中 下	2 (40.0) 10 (37.0) 13 (46.4)	3 (60.0) 17 (63.0) 15 (53.6)	12 (16.9) 146 (24.0) 141 (29.7)	59 (83.1) 463 (76.0) 333 (70.3)	0 17 (26.6) 11 (22.0)	6(100.0) 47 (73.4) 39 (78.0)	#
	χ ² テスト			※				
9 子盾	上 中 下	0 11 (40.7) 18 (64.3)	5(100.0) 16 (59.3) 10 (35.7)	26 (36.6) 262 (43.0) 241 (50.8)	45 (63.4) 347 (57.0) 233 (49.2)	0 25 (39.1) 23 (46.0)	6(100.0) 39 (60.9) 27 (54.0)	
	χ ² テスト	※		※※				
10 不 一 致	上 中 下	2 (40.0) 11 (40.7) 13 (46.4)	3 (60.0) 16 (59.3) 15 (53.6)	18 (25.4) 179 (29.4) 189 (39.9)	53 (74.6) 430 (70.6) 285 (60.1)	1 (16.7) 16 (25.0) 16 (32.0)	5 (83.3) 48 (75.0) 34 (68.0)	
	χ ² テスト			※※				

#…………… 05 < P < .1 ※…………… P < .05 ※※…………… P < .01

性格特性においても同様な成績であり、出生時体重の大小と社会的条件の両要因の影響は、全体的に出生時体重に比し社会的条件の良否による影響の方がより強いといえ、それは成熟児群における社会的条件の良否によるその著明な差異に見ることが出来る(表8)。

表 8 社会的要因別性格特性 (%)

		～ 2 5 0 0		2 5 0 1 ～ 3 7 0 0		3 7 0 1 ～		
		不 ～ 良 30	良 35 好 ～	不 ～ 良 30	良 35 好 ～	不 ～ 良 30	良 35 好 ～	
1 顕示性	上 中 下	1 (20.0) 6 (22.2) 5 (17.9)	4 (80.0) 21 (77.8) 23 (82.1)	21 (29.6) 129 (21.2) 110 (23.2)	50 (70.4) 480 (78.8) 364 (76.8)	2 (33.3) 17 (26.6) 13 (26.0)	4 (66.7) 47 (73.4) 37 (74.0)	
	χ ² テスト							
2 神経質	上 中 下	1 (20.0) 9 (33.3) 9 (32.1)	4 (80.0) 18 (66.7) 19 (67.9)	11 (15.5) 165 (27.1) 139 (29.3)	60 (84.5) 444 (72.9) 335 (70.7)	2 (33.3) 22 (34.4) 14 (28.0)	4 (66.7) 42 (65.6) 36 (72.0)	
	χ ² テスト			※				
3 不安	上 中 下	1 (20.0) 7 (22.2) 7 (25.0)	4 (80.0) 20 (77.8) 21 (75.0)	5 (7.0) 106 (17.4) 104 (21.9)	66 (93.0) 503 (82.6) 370 (78.1)	1 (16.7) 10 (15.6) 7 (14.0)	5 (83.3) 54 (84.4) 43 (86.0)	
	χ ² テスト			※※				
4 自制力	上 中 下	1 (20.0) 8 (29.6) 7 (25.0)	4 (80.0) 19 (70.4) 21 (75.0)	11 (15.5) 97 (15.9) 87 (18.4)	60 (84.5) 512 (84.1) 387 (81.6)	1 (16.7) 12 (18.8) 10 (20.0)	5 (83.3) 52 (81.2) 40 (80.0)	
	χ ² テスト							

		～ 2 5 0 0		2 5 0 1～ 3 7 0 0		3 7 0 1～	
		不 ～ 30	良 35	良 ～ 30	好 35	不 ～ 30	良 35
5 依存性	上 中 下	1 (20.0) 8 (29.6) 7 (25.0)	4 (80.0) 19 (70.4) 21 (75.0)	10 (14.1) 136 (22.3) 129 (27.2)	61 (85.9) 473 (77.7) 345 (72.8)	1 (16.7) 14 (21.9) 11 (22.0)	5 (83.3) 50 (78.1) 39 (78.0)
	χ^2 テスト	※					
6 退行	上 中 下	1 (20.0) 6 (22.2) 5 (17.9)	4 (80.0) 21 (77.8) 23 (82.1)	6 (8.5) 119 (19.5) 111 (23.4)	65 (91.5) 490 (80.5) 363 (76.6)	0 9 (14.1) 12 (24.0)	6(100.0) 55 (85.9) 38 (76.0)
	χ^2 テスト	※					
7 攻撃	上 中 下	1 (20.0) 9 (33.3) 7 (25.0)	4 (80.0) 18 (66.7) 21 (75.0)	19 (26.8) 148 (24.3) 141 (29.7)	52 (73.2) 461 (75.7) 333 (70.3)	1 (16.7) 22 (34.4) 16 (32.0)	5 (83.3) 42 (65.6) 34 (68.0)
	χ^2 テスト						
8 社会性	上 中 下	1 (20.0) 5 (18.5) 6 (21.4)	4 (80.0) 22 (81.5) 22 (78.6)	7 (9.9) 78 (12.8) 79 (16.7)	64 (90.1) 531 (87.2) 395 (83.3)	1 (16.7) 7 (10.9) 7 (14.0)	5 (83.3) 57 (89.1) 43 (85.0)
	χ^2 テスト						
9 家庭適応	上 中 下	0 5 (18.5) 4 (14.3)	5(100.0) 22 (81.5) 24 (85.7)	5 (7.0) 83 (13.6) 88 (18.6)	66 (93.0) 526 (86.4) 386 (81.4)	0 8 (12.5) 11 (22.0)	6(100.0) 56 (87.5) 39 (78.0)
	χ^2 テスト	※					
10 学校適応	上 中 下	0 2 (7.4) 4 (14.3)	5(100.0) 25 (92.6) 24 (85.7)	5 (7.0) 48 (7.9) 51 (10.8)	66 (93.0) 561 (92.1) 423 (89.2)	1 (16.7) 6 (9.4) 5 (10.0)	5 (83.3) 58 (90.6) 45 (90.0)
	χ^2 テスト						
A 体質的安定	上 中 下	0 4 (14.3) 3 (10.7)	5(100.0) 23 (85.7) 25 (89.3)	1 (1.4) 50 (8.2) 33 (7.0)	70 (98.6) 559 (91.8) 441 (93.0)	0 4 (6.3) 3 (6.0)	6(100.0) 60 (93.7) 47 (97.0)
	χ^2 テスト	#					
B 個人的安定	上 中 下	1 (20.0) 14 (51.9) 13 (46.4)	4 (80.0) 13 (48.1) 15 (53.6)	20 (28.2) 195 (32.0) 193 (40.7)	51 (71.8) 414 (68.0) 281 (59.3)	2 (33.3) 21 (32.8) 19 (38.0)	4 (66.7) 43 (67.2) 31 (62.0)
	χ^2 テスト	※※					
C 社会的安定	上 中 下	1 (20.0) 6 (22.2) 8 (28.6)	4 (80.0) 21 (77.8) 20 (71.4)	6 (8.5) 113 (18.6) 117 (24.7)	65 (91.5) 496 (81.4) 357 (75.3)	1 (16.7) 10 (15.6) 12 (24.0)	5 (83.3) 54 (84.4) 38 (76.0)
	χ^2 テスト	※※					

#…………… 05 < P < .1 ※…………… P < . 05 ※※…………… P < . 01

考 察

低体重児の情緒発達をめぐる諸家の研究では、今日一致した見解はないが、Douglas⁽⁶⁾は落つきがなく、怒りつぼく、精神集中力に欠けるとし、Beskow⁽⁷⁾も低体重児に神経症的症状を指摘、Shireley⁽⁸⁾は低体重児特有のbehavior syndromeのある事を示唆している。川崎も⁽⁹⁾Rorschach test を用い就学時より4年時までの追跡研究にて、低体重児群は成熟児に比し、情緒的により未熟で、安定性に欠け適応性に劣るものが多いとし、

Resenzwig の絵画欲求不満テストの成績にても同様な結果を認めている。

著者の研究では対象が4才児であるため、性格特性については母親からの回答を求めたがその結果、低体重児群に特別な差異を認めることは出来なかった。しかし出生時体重の大小による情緒発達への関与は皆無とはいききれず、体重の大なる群ほど良好な特性の出現は多い。又養育態度において、低体重児群の母親に積極的拒否、干渉かつ盲従の傾向が他の群より強く見られていることから、「低体重児」いう出生に対し過度な不安、焦燥がこの幼児期に至っても親自身の養育行動に何程かの問題を生起せしめているともいえる。

さらに Rothschild¹⁰⁾は低体重児の情緒発達の問題に対し、保育器による長期の隔離を重視しており、著者の成績でも同じ低体重児との比較にて、保育器使用群にいくつかの情緒的問題を指摘している。事実、強度な身体的生理的未熟性をもつ彼らの個体的要因に基因することは必至であるが、他方人生初期の感覚的情緒的刺激の欠如によるその後の情緒的社会的発達における障害が指摘されてきている今日、彼らにとっても発育上における適度な環境刺激の必要性を示唆することは可能だと言える。今後の保育器養育における一つの課題であるといえるかもしれない。

最後に社会的要因の影響について Waters & Crandall¹¹⁾は親の養育面で、社会経済的地位の低い母親に強制的行動が多く、子どもの行動に制限的な規則を課すことも多く、又育児の方針に一貫性がなく、促進的な試みも少い。他方地位の高い母親はより明確な育児方針を用いており、子どもの達成的発達を促そうとすることも多いと指摘している。石黒¹²⁾、古賀¹³⁾らも社会的要因の研究にて育児行動における差異を明確にしている。

著者の成績にても社会的条件の良否による差異を認め、情緒面においても同様な傾向であった。しかも佐藤ら¹⁴⁾の指摘のように、その影響の強さは出生時体重の大小よりもより支配的であると思えた。

結 論

長崎市内の幼稚園4才児組の在園児1334名について、出生時体重の情緒的発達への関与を検討するため、田研式親子関係診断テスト、幼児児童性格診断テストならびに生育歴調査を行い分析を試みた。その結果

(1)出生児体重別にみた親の養育態度では、低体重児群の母親に他の2群に比し、積極的拒否、干渉、盲従的態度の傾向を強くみた。性格特性ではすべての項目に体重群間の差異を見ることは出来なかった。

(2)保育器の使用有無別にみた親の養育態度では、同じ低体重児との比較にて、使用群の母親に厳格、矛盾的態度の傾向を強くみた。性格特性では、使用群に自制力の欠如、退行的、攻撃衝動的、家庭不適応、個人的不安定に有意な差異を認め、なお情緒不安定、体質不安定にもその傾向をみた。

(3)社会的要因別にみた親の養育態度では、同じ社会的条件内では出生時体重の大なる群により良好な態度の出現をみ、同じ体重群内では社会的条件の良好な群により好ましい親の態度の出現をみた。

性格特性においても同様であり、社会的条件の良否による影響の方が出生時体重の大小よりも強いと思えた。

以上の成績から、出生時体重の情緒発達への関与は皆無とはいききれず低体重出生子防は勿論、出生後の養育をめぐる親の態度、保育器内環境のあり方さらに社会的環境の改善

向上が望まれる。

最後に御理解ある御支援と御配慮を下さいました幼稚園当局の諸先生及び被験児とその御父兄の方々に厚くお礼申し上げます。

(1)Drillien,C.M. : School Disposal and Performance for Children of Different Birth Weight Born 1953-1960. Arch.Dis .Child. 44, 562-570,1969

(2)Wiener, G. et al : Correlates of Low Birth Weight, Psychological Status at 8 to 10 Years of Age. Pediat. 2, 110-118, 1968 .

(3)相沢 龍：出生時体重と心身の発達発育をめぐって，日衛誌，28(1)，33-36，1973．

(4)品川不二郎他：田研式親子関係診断テストの手引。日本文化科学社。

(5)高木俊一郎他：幼児児童性格診断検査の手引。金子書房。

(6)Douglas, J W. B. :Mental Ability and School Achivement of Premature Children at 8 Years of Age. Brit. Med. J. 26,1210-1214 ,1956.

(7)Beskow, B. : Mental Disturbances in Premature Children at School Age. Acta'Pediat .37, 125-149.1949.

(8)Shireley, M. : A Behavior Syndrome Characterizing Prmaturely Born Children. Child Develop. 10, 115-128, 1939.

(9)川崎ナオミ：未熟児の発生並びに発育に関する社会医学的研究，精神的発達編（第2報）。長崎綜公衛誌，9(2)，35-48，1960。

(10)Rothschild, B.F. :Incubator Isolation as a Possible Contributing Factor to the High Incidence of Emotional Disturbance Among Prematurely Born Persons. J. Genet. Psychol. 110, 287-304, 1967.

(11)Waters, E. et al :Social Class and Observed Maternal Behavior from 1940 to 1960. Child Develop. 35, 1021-1032, 1964.

(12)石黒大義：社会階層と人間関係，児童心理，10，447-453，1956。

(13)古賀行義他：養育行動とパーソナリティの社会心理学的研究Ⅲ,Ⅳ,Ⅴ。日本心理学会第24回大会発表論文集，193-195，1962。

(14)佐藤新治他：出生時体重と学童期の精神発達（Y-G性格検査成績），日本教育心理学会第11回発表論文集，50-51，1969。